

グルジェフ『ミーティングの記録』

主要な登場人物

ミーティング当時の年齢がわかるように著名人については生年だけを示した。

- ムッシュー・グルジェフ（1866?～）

「私は年寄り。もう七十六だ。私は自分にふさわしい役割を演じ、おかげで子供たちの人気者だ。子供たちも、そのお母さんも、おばあさん、お父さんも、みんな私が大好きだ」



- マダム・ド・ザルツマン（1889～）

ジュネーヴで音楽と舞踏を学ぶ。ロシア革命のさなか、夫のアレクサンドルとともにグルジアのチフリスでグルジェフと出会う。長い年月をグルジェフと共に過ごした。



- マダム・エティヴァン

マダム・ド・ザルツマンの縁者。息子のジャック（兄）とアルフレッド（弟）も登場。

- ジャック・エティヴァン

ミーティングで書記役を務めた。マダム・エティヴァンの息子。ニックネーム「地方判事どの」。

- アルフレッド・エティヴァン

ジャックの弟。写真中央。



- ナタリー・エティヴァン (Natalie de Salzman de Etievan)

愛称ブジーク。ミーティングのなかで名前だけ言及される。のちに南米にてワークグループを発足させる。

- マダム・ヴィー

- マダム・フランク

ニックネーム「ブロンド」。マダム・ヴィーとは姉妹の関係。

- ムシャン

男性のグループメンバー。グルジェフはマダム・フランクとムシャンが最初の関門を抜けたことを喜び、ふたりを「私の妹」、「私の弟」と呼ぶ。

- ドクター・アブルカ

グルジェフと親しいお医者さん。

- **トラコル夫妻**

夫のアンリ・トラコルは、元ジャーナリスト／彫刻家であり、夫人とともにグルジェフのもとで十年あまり学んだ。ミーティングの記録で「トラコル」として登場するのは、夫人のようである。

- **ミス・ゴードン**

「人間の調和的成長のための学院」があった当時からのグルジェフの生徒である。イギリス人であるにも関わらず、ナチスのパリ占領後にもパリでグルジェフの元に留まることを選んだ。やがて強制収容所に入れられ、解放後まもなく逝去する。ミーティングの場にいたことは間違いなく、何度か名前が言及されるが、本人の発言は記録されていない。

- **マダム・デュボー**

学校の先生をしていたとうかがわれる。

- **フィリップ・ラヴァスチン**

著述家・翻訳家。『マハーバラータ』の翻訳など、インド哲学の紹介者として知られる。作家仲間のルネ・ドーマルをグルジェフに紹介した。一九四〇年ごろからグルジェフのもとで学んでいる。

- **ルネ・ドーマル（1908～）**

作家・詩人としてシュルレアリズム運動のなかで一定の役割を果たしたのち、ザルツマン夫妻のもとでワークに加わった。未完のワーク小説『類推の山』に登場するソゴル博士は、アレクサンドル・ザルツマンがモデルである。のちにグルジェフのもとでのミーティングにも加わり、発言は少なかったが、エクササイズへの取り組みには熱心だったと伝えられる。ミーティングで名前が言及されるが本人の発言は記録されていない。



- **ヴェラ・ドーマル**

ルネ・ドーマル夫人。ロシア系ユダヤ人のためナチ占領下のパリを訪れるには多大な危険を冒さなければならなかった。グルジェフとの間でのいくつかのやりとりが記録されている。

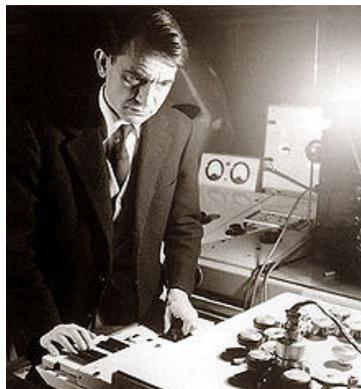
● ルーク・ディートリヒ（1913～）

グルジェフは親愛の情を込めて「プチ」と呼んだ。崩壊した家庭に生まれ不幸な少年時代を送った後、若くして作家・写真家・社会活動家として知られるようになる。ルネ・ドーマルの作家仲間。



● ピエール・シェフェール（1910～）

フランス・ラジオ・テレビ局（RTF）の技師で、音響振動学研究家、具体音楽（ミュージックコンクレート）の創始者。作家としても知られる。戦時中はレジスタンス運動に関与していた。のちにグルジェフに関するテレビのドキュメンタリ番組を制作。



● ルネ・ズベール（1902～）

写真家・映画作家。『あなたはだれ、ムッシュ・グルジェフ？』と題された本の著者として知られる。

ソランジュ・クロステス

現在オランダ在住。年齢不詳だが当時は非常に若かったはず。職業の選択をめぐり、本書に収録したグルジェフの助言を受けたのちに心身統合的アプローチを追求するセラピスト、およびムーヴメントの教師として活躍。著書『La Prise de Conscience et G. I. Gurdjieff』。



ほかの参加者として、カーン（男性）、ランクタン（おそらく男性）、ルボー（若い男性）、ポムロー（おそらく男性）、シモーヌ（女性）、マドモワゼル・ルプルドーム、マドモワゼル・ドリンガーなどが登場する。